

〈第 82 回例会：講演と映画「コルチャック先生の思想と生涯」、札幌エルプラザ、2018.3.24〉

## ～ポーランドの旅 帰国報告～

塚本 智宏

映画『コルチャック先生』の上映に合わせて、上記テーマで講演の機会が与えられた。映画については前号で書いたので省略し、講演で主に言及した冬のコルチャック・ポーランドスタディツアーで得た、特にポーランド子どもオンブズマンに関する情報を紹介して、依頼された講演要旨に代えたい。

ツアーの行き先は、ワルシャワとクラクフ及びその近郊(コルチャック記念館、ポーランド国立ユダヤ博物館、子どもオンブズマン庁、トレ布林カ及びアウシュビッツなど)で、コルチャックの思想と生涯からの学びをメインテーマにしたスタディツアーである。

コルチャック記念館では、館長・史料研究者マルタ・チェシエルスカさんに講演を依頼し、長らくコルチャック史料研究(全集[1992～]の編纂)に携わってきたことをお話しいただいた。コルチャックは世界的な子どもの権利思想や実践の開拓者の一人として注目されるが、彼はより広い視野で子どもを捉えようとして、これを(1)(大人との)「対等な」人間関係において、(2)「各自の自律的な生き方」を持つ人間として、(3)「各個人の尊重と尊厳」が重んぜられるべきだという思想をもっていたと紹介し、さらに彼の行動のスタイルは多様で、教育実践の中では(個々の)子どもの権利を、他方では社会制度上の憲法や国際的なジュネーブ宣言のレベルでの子どもの権利保障も要求し、現代でいう子どもオンブズマン(子どもの権利の擁護官)として活動したと、彼の思想と活動を手短かに的確にお話しいただいた。

この講演を聴きながらコルチャックの体験したエピソードを思い出した。彼がある非行少年の弁護において、人類の社会的な利益の三分の一は子ども

に”お恵み”ではなく”権利”として与えられるべきだと主張したのに対して、それが具体的には何のことかと尋ねた当時のワルシャワの裁判官が「おわかりだと思いますが、これは私には全く初めてのことです。私は過去の一度も子どもが人間であるなどと考えたことはありません」と言ったのである。

この講演のあと子どもオンブズマン庁を訪問し懇談したが、そこでの姿勢や事業にコルチャックの思想の継承を感じ取るようになった。現長官(8月末まで)はコルチャックの思想を学んだ人物で、彼の論文や講演には必ずといっていいほどコルチャックが引用され、また彼自身直に全国の子どもからの相談(子ども信頼電話)にのったりすることもあるという。全国での大人向け啓発ポスターには、子どもを軽視・見下さず一個の人間として尊重してくださいというメッセージがあり、この庁の発足(2000)以降につくられた「子どもの権利法典 Kodeks Praw Dziecka」全10条の前文には、「覚えておいてください—人間の権利は、子どもの権利から始まる！」と規定されている。今後もポーランドの子どもに対するオンブズマンの動向(≠大人の姿勢)を追跡してみたい。

(つかもと・ちひろ)



(左) オンブズマンスコットと信頼電話小カップ  
(右) 子ども版パンフ子どもの権利条約

## ジョルィ市のピウスツキ没後百年記念行事に参加して

尾形 芳秀

去る5月、ポーランド・シロンスク県の県都カトヴツエ近郊にあるジョルィ市立博物館において、ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年を記念する展示のオープニングと銅像の除幕式に出席しました。

この一連の行事は、5月にジョルィ博物館で始まり、ポーランドが独立を回復した記念日の11月11日まで続きます。今後はクラクフの日本美術技術博物館でも同様のシンポジウムが開催されます。この会期は兄ブロニスワフの命日から弟ユゼフの初

代元首就任までで、ピウスツキ兄弟がポーランドの独立回復に大きく貢献したことを示しています。

ジョルィ市立博物館は企画展や展示方法において高く評価され、ヨーロッパ各地の同規模の博物館の中でも高い評価で知られています。

今回はポーランドでは初となるブロニスワフ像の除幕式が行われました。この像は、ブロニスワフの前でアイヌ女性の語り部が蝸管蓄音機で収録する様子をモチーフとしています。この像の近くには、

1903年の北海道アイヌ調査を率いたヴァツワフ・シエロシエフスキの像もあり、二人はサハリンや北海道のアイヌについて語り合っていることでしょう。

式典には、二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治館長、平取町教育長庄野剛氏と平取のアイヌ工芸家関根真紀夫妻、北大アイヌ・先住民研究センター山崎幸治准教授(博物館学)も出席されました。

ピウスツキの親族からは、5月17日モンモランシー墓地とパリ・ノートルダム大聖堂で追悼式に参加された、英国在住のヴィルト・コヴァルスキ氏とご子息アレクサンデル氏、ユゼフのひ孫ダヌタ・オニシキェヴィチ氏が参加されました。中でもアレクサンデル氏はブロンスワフに本当によく似ていて驚きました。

そのほか、ヴァルデマル・チェホフスキ監督、トルンのアルフレト・マイェヴィチ教授、クラクフの日本美術技術博物館のカタジナ・ノヴァク副館長やアンナ・クルル学芸員ら旧知の方々にもお会いできて、2013年白老におけるピウスツキ像除幕式や、2017年白老・平取訪問の思い出に話が弾みました。

来賓の祝辞では在ポーランド日本大使館高橋了臨時代理大使が挨拶されました。歓迎晩さん会では当会が代理大使の隣の席に指定されました。

この企画を当初から支援されてきた、前ポーランド広報文化センター所長ミロスワフ・ブワシチャック氏(現ポーランド・日本交流センター代表)も出席され、さらに元広報文化センター職員でピアニストの栗原美穂さんの「現代音楽における日本文化のさまざまなイメージ」と題する演奏会の司会を務められ、

日本通らしく曲の内容を懇切丁寧に解説されました。そのなかで、この企画展に対する当会の支援とこれまでの長年の日本とポーランドの交流活動に対して感謝の言葉が述べられました。

また、この企画のスタートから全てにわたってコーディネートされたワルシャワ在住の松本照男氏に、ジョルイ市立博物館・同市博物館審議会より感謝状と記念品が贈呈されました。

白老や札幌でもお会いしたポーランドの旧知の人々と旧交を温めることができたのは幸いでした。夜はほぼ毎晩ディナーに招かれ過分な接待を受けました。中でも旧シュラフタの館での晩さん会では往時を偲ぶことができました。

最後になりましたが、ルチアン・ブハリック博物館長が過密なスケジュールの中、自ら運転して近郊の文化遺産の紹介や送迎に奔走してくださったことに感謝したいと思います。(おがた・よしひで)



左:ブハリック・ジョルイ市立博物館長、  
右:ブワシチャック前ポーランド広報文化センター所長

## 2018 ポーランド憲法記念日レセプションに出席して

5月23日ポーランド憲法記念日のレセプションに出席いたしました。ご存知とは思いますが、ポーランドの憲法記念日は戦後日本の憲法記念日と同じ5月3日で、民主的な憲法としては世界的にも米国に次ぐ2番目に古い憲法となっております。

今年はポーランド独立回復から100年目ということで、ヤツェク・イズドルチク駐日ポーランド共和国大使のカタコトの日本語を交えた式辞の挨拶にも力がこもっていたように感じました。

アトラクションとしてショパンの「革命」のピアノ演奏がありました。舞台には両国の国旗とともに、群馬県の作者による日本の着物「友禅」も展示されていて、存在感をアピールしていました。

引き続き、参議院日本ポーランド友好議員連盟会長・中曽根弘文参議院議員による祝辞と乾杯の挨拶がありました。

当日は、元駐日ポーランド大使で、今や、日本の伝統芸能である能の作者でもある、ヤドヴィガ・ロドヴィッチさんも出席されていて、同席されたピアニストの遠藤郁子さんとも和やかに近況を語り合っておられました。(霜田 英麿、東京事務所長)



(左より) 筆者、イズドルチク大使、遠藤郁子さん